

元和二年、土佐漂着イスパニア船について

著者	小野 美子
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	20
ページ	143-157
発行年	1968-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/11060

元和二年、土佐漂着イスパニア船について

小 野 美 子

一、はじめに

二、土佐へのイスパニア漂着船

三、元和二年度の漂着船

(一) 山内家の漂着船対策

(二) 漂着船乗組員の取扱ひ

四、おわりに

一、はじめに

近世初頭、日本とイスパニアとの交渉は、一五八四年（天正一二年）にルソン島のマニラからマカオに向つていた船が針路を誤つて彷徨し、松浦領平戸に入港したのが最初である。⁽¹⁾それから約四〇年後、一六二五年（寛永二年）にフィリッピン長官フェルナンド・デ・シルバ（Fernand de Silva）によつて遣わされたイスパニア使節の一行が幕府が上陸を許さず、以降の来航を拒絶し、⁽²⁾マニラに追ひ返して彼我の交渉は、一応の終結に至る訳である。

元和二年土佐漂着イスパニア船について（小野）

当時の日本は、長い争乱の後、織田信長の征覇、豊臣秀吉の全国統一を経て、徳川氏二五〇年に互る政權の確立期であつた。そして、これらの諸為政者が軍事財政面の基礎確立に當つて、重視したのが、ポルトガル・イスパニア・オランダ・イギリスの欧州四国との通交貿易であつた。この内、ポルトガルは断続的にせよ約九〇年間に互つて、カビタン・モールの制によつて、ある程度定期的な貿易が行われ、又、オランダ・イギリスは平戸に商館を設置して、ポルトガルを凌ぐ勢力を持つに到つてゐる。

しかし、イスパニアについては、その貿易の方法に、つまり常にキリスト教を随伴した植民政策を押し進めるような態度も見えて、日本の為政者の感情を刺激し、加えて貿易自体も、フィリッピンとノバ・イスパニア間での対立や、オランダ・イギリスの圧迫などによつて、一応双方で協定が結ばれても、それに相應する通商を行うことが困難であつたことなどが、第一に貿易の利を求める日本の為政者に好印象を与えない原因となつた。そして、そ

これらのために、イスパニアの貿易・渡航の状態は、他の欧州三カ国に比べてはつきりしない点が多いように思われる。

この論文では、対イスパニア交渉の実態を把握するため、先ずその第一段階として、漂着イスパニア船を総括的に眺め、その中において特に土佐清水港に漂着した船に対して、日本側の採った処置などを具体的に追ってみたいと思う。

二、土佐へのイスパニア漂着船

イスパニア船が日本に初めて来航したのは、一五八四年八月

イスパニア船漂着地

年度	漂着した月	漂着地
一五八四	八月	平戸
一五八七	七月	天草サシノツ
一五八九	九月	薩摩片浦
一五九〇	六月	薩摩山川
一五九六	一〇月	土佐浦戸
一六〇二	九月	土佐清水
一六〇四	六月	薩摩阿久根
一六〇五	六月	薩摩
一六〇九	九月	上総岩和田
一六〇九	九月	豊後
一六〇九	六月	土佐清水
一六〇九	九月	薩摩坊の津
一六一六	九月	計

(天正一二年六月)で、それから四一年後、一六二五年(寛永二年)に国交が断絶するまでに、約三八隻のイスパニア船が日本の諸港に入津している。⁽³⁾ その来航イスパニア船全体についての一つの特徴は、漂着船の多い事である。上記の表にまとめてある船は、日本を目的としたのではなく、種々の理由で己むなく日本に寄港した船である。これが、全来航数の約三割に当たる一二隻に上っている。

その一二隻の中の九隻(○印の船)は、マニラとノバ・イスパニア航路の船である。これは所謂、イスパニアが東洋貿易を行ったガレオン船(galleon)と云われるもので、通常、二隻編成で航海する。⁽⁴⁾ 往路は、ノバ・イスパニアのアカブルコ港からマニラのカビテ港まで、二月末頃から五月末まで約百日をかけ、帰路は、カビテ港を六月二〇日頃に出発して、颱風の危険に晒されながら、往路に倍する航程であったもので、日本に漂着したこの航路途上の船の内、七隻が帰路の船である。故に、これらの漂着船の入港地も薩摩五回・土佐三回・其他上総・豊後・平戸・天草がそれぞれ一回と、圧倒的に太平洋に面する海港が多いし、又、この航路を知っていたが故に、浦賀・仙台に領地を有する家康や伊達政宗はイスパニアとの通交を希望し、その為に種々の策を巡らしたのである。⁽⁶⁾

土佐への漂着船で、従来まで判明したのは、慶長元年のサン・フェリペ号(San Felipe)と、慶長七年のエスピリット・サント号(Espiritu Santo)であった。

一五九六年一〇月一七日(慶長元年八月二六日)、浦戸湾に入港

したサン・フェリペ号は、マニラからノバ・イスパニアへ帰航の途中、嵐に遭い漂着した。この船は、積荷の没収や、乗組員の監禁等の厳しい処置を受け、ひいては、秀吉のキリシタン禁教令を無視して布教活動を行っていたフランシスコ会宣教師等二十六人の殉教という事態を引き起した事で、余りにも有名である。⁽⁷⁾

其後、秀吉が歿し、日本の主導権が家康の手に移ると共に、対外政策も一転し、彼は、フランシスコ派の宣教師へロニモ・デ・ヘスス (Jeronimo de Jesus) を通して、フィリッピンとの通交を希望する平和的な態度を示していた。⁽⁸⁾

四国の土佐は、関ヶ原役で西軍に組した領主長曾我部氏が廃され、慶長五年、山内一豊が高知城主として封ぜられた。そして、一六〇二年九月 (慶長七年八月)、エスピリット・サント号が清水港に漂着した。この船はマニラからノバ・イスパニアへ向って僚船イエズス・マリア号 (Jesus Maria) と航行中、大時化に遭って漂流していたのである。司令官のドン・ロベ・デ・ウリョア (Don Lope de Ulloa) は、山内氏の求めに応じて、弟のドン・アロンソ・デ・ウリョア (Don Alonso de Ulloa) 他五人を使節として江戸に遣わした。其後、土佐では、船の出帆を妨げる為に見張りをたて、材木を港口に投じ、又、帆柱を陸に揚げる事を強要した。サン・フェリペ号事件が記憶にあるイスパニア人達は危険を感じ、港口に張られた縄を断って脱出を計り、日本人と争って、双方共に死傷者を出しながらもマニラに逃げ帰ってしまった。山内家は、陸に残されたイスパニア人等四十人程を捕えて家康の元に送ったが、フィリッピンと通商の交渉を行っていた家康

元和二年土佐漂着イスパニア船について (小野)

は、却って山内家の処置について譴責し、ドン・アロンソ・デ・ウリョア等使節一行と、残されたイスパニア人を手厚く接待してマニラに送り帰した。⁽⁹⁾

その際は、⁽¹⁰⁾「慶長七年稔藏壬寅秋九月日」附けの呂宋国主宛の書翰を託し、八通の朱印状を与え、且つ国内に対して来航するイスパニア船を優遇するようにしている。

以上のように、サン・フェリペ号は、秀吉の、所謂強硬外交の一端を如実に示すものであり、後者、エスピリット・サント号は家康の対外交渉初期に起きた紛争事件で、この時、彼の執った処置は、外国商船優遇の幕府の態度を明確に表わしており、この二船は、四一年間に渡る対イスパニア交渉過程に重要な位置を占めているのである。

三、元和二年度の漂着船

(一) 山内家の漂着船対策

わが対イスパニア交渉も暗礁に乗り上げ始めた一六一六年 (元和二年) に、またも、イスパニア船が土佐清水港に漂着した。これについては、大日本史料一二編二八の元和三年一月二一日の項の綱文に、

是ヨリ先、呂宋国ノ船、土佐ノ海岸ニ漂著ス、是日、同国、書ヲ土佐高知城主山内忠義ニ寄セテ、其扶助ヲ受ケタル好意ヲ謝ス、

とあって、呂宋国太守「フィリッピン長官、フィリッピンでは前長官ドン・フワン・デ・シルバ (Don Juan de Silva) が一六一六

年に死去し、次の長官のドン・アロンソ・ファハルド・デ・テンザ (Don Alonso Fajardo de Tenza) が一六一八年赴任するまでの二年間は、長官不在であった。⁽²¹⁾そこで『Audencia』⁽²²⁾が一時、その任に当たっていたと思われる」と土佐藩主山内忠義の間で往復された書翰が載せてある。それによると、この前年、つまり元和二年に土佐に漂着した呂宋船優遇の謝礼として、フィリピン長官が忠義に布帛一八疋を贈り、一方忠義も一月一日附で返書して、船の往来を歓迎する旨を述べている。

これを手掛りとして探した結果、高知県立図書館に、この船に關して往復されたカピタン (Capitan) とゼネラル (General) のインキ書き自筆の署名のある書翰五通を含む二三通が残っていたのを始め、其他若干の史料をも見出したので、以下、これ等の史料に基いて、この漂着船の状態を追ってみた。

この船の処置・対策については、藩主山内忠義の実弟で幡多郡中村に住居する山内吉兵衛と、高知で近習家老を務める生駒木工とが當っており、この二人の間で交換された一通の書翰がある。⁽¹⁵⁾その最初は六月四日附のもので、

應以飛脚致言上二候、今月二日之御書、同四日之午之刻ニ参着致拜見一候、(以下略)

元和二年六月四日

山 吉兵衛

生駒木工殿

とあって、清水港へ入津した漂着船に対する指示への返答が成されている。これで見ると、既に六月二日以前に漂着船入津を知らせる報告が山内吉兵衛から出されている筈であるし、高知と中村

間の書翰は片道二日から五日かかっているもので、この船は少くとも五月の末には、土佐清水港に入津していたのであろう。

漂着船に対して吉兵衛配下の者達は、慶長七年の船のような争いを生じないように種々対策を練って、船の出帆を妨げている。例えば、先の六月四日附の山内吉兵衛から生駒木工への報告に、

一清水唐船之儀たらし候へと被⁽¹⁶⁾仰下二候、此儀三浦介左衛門榎木左太夫申付、かち帆柱上申様ニと種々才覚仕候へ共、唐人中々合黙不仕候、

一唐人之水薪木其外食物之儀、一日切ニ遣候様と被⁽¹⁷⁾仰下二候、此中左様ニ申付候、

(中略)

一唐仁舟無理ニ留申候而可⁽¹⁸⁾然と思ひ候者、其元々閩舟数々被⁽¹⁹⁾仰付、其上清水近所材木を取せ、湊口を右之材木ニ石を付しつめ被⁽²⁰⁾成候か、又ハ釣舟なと五百艘千そう⁽²¹⁾石を入しつめ候か、外ニハ才覚も罷成間敷由、爰許に而談合仕御事ニ御座候、とあって、舵や帆柱は陸に揚げさせ、支給する水・薪・食物など一日分ずつ与える。そして、清水近在から集めた材木に石を付けて沈め、釣舟に石を積んで沈めたりして、港口を閉鎖しようとして苦心慘憺している。

一方、そのような日本側の態度が、前回のようにイスパニア人に対して警戒の念を抱かせないように、船奉行二人からの書翰に、退而申上候、此中の手口ハ、鳥などを志摩守助左衛門御代官所へ被⁽²²⁾申付、唐人共一段索存候通、我等迄申聞候、一段肝煎ニ御座候、以上、

と、食用に鳥を与えていると認めてあり、又、六月一二日に吉兵衛が生駒木工に報告した書翰に、

今朝以飛脚ニ申上候、艘湊口ふさぎ申様子ハ、其御左右次第可申付候、則黒船主かびたん中村へ遊山ニ参度与申候之条、召連参候、此上ニて候ニ、又湊口切塞中儀者いか御座可有候哉、自然聞付無理ニ罷出候ハ何と被仰付へく候哉、追々様子可被仰下候、

とかくニたらし、かびたん中村ニ相留、其上其地へ参候様ニ可仕と奉存候、左様仕内ニハ江戸御左右可有存候、

とあつて、カピタンを中村まで、遊山と称して連れて行き、そこに留め置いて江戸からの沙汰を待たせたらどうかと言っている。カピタンが居なければ、急に出帆することも無いであらうとの配慮である。

上佐の人々は、船が脱出するのを非常に恐れており、中村在の吉兵衛から高知の生駒木工への返書に

「唐人舟之儀、其許へ御ひかセ可被成候由御尤奉存候、⁽¹⁹⁾

という、城下に近い浦戸湾まで船を廻すような意見もあり、実際に七月一日には、

唐船の儀、^(葉下近)下ノ加や迄引付候由、昨日先書ニ申入候、併俄ニ海上ニ風吹出候而綱手之引舟も浦々へさし入候、唐船も先以、本

之清水浦へ戻候由申越候、⁽²⁰⁾と、下賀江港まで船を引いて行つたのだが、大風のために清水へ戻つて来ている。

漂着した外国船を浦戸湾まで廻航した例は、これより先慶長一

元和二年土佐漂着イスパニア船について（小野）

二年（一六〇七年）に幡多郡小間目浦に唐船が漂着した時、

慶長十二年丁未年六月廿日酉刻、幡多郡小間目浦へ唐船一艘流寄、

（中略）但右ノ船浦戸へ御引寄ノ筈ニテ、彼津乗出処、海上悪、

七月七日清水浦へ乗戻、其後同月ノ末浦戸へ御引寄被成、是ハ

先年黒船幡多郡清水浦へ入津、番人被附置⁽²¹⁾処、人質ヲ捨置、

夜スケニ出船仕故、為御用心此度如⁽²²⁾此也、とあつて、一度は失敗し、再度浦戸まで船を引いていったが、それは、慶長七年度のエスピリット・サント号の二の舞にならない用心のためであると言っている。浦戸は、高知に最も近い港なので

山内家が監視するには最適な港湾であつた。故に、元和二年のイスパニア船も前記のように、浦戸への廻航を試みたのだが、一度

失敗してからは、イスパニア人の間に別に疑わしい様子も無いので取り止めになつてゐる。⁽²²⁾

六月二日頃、カピタンは中村の山内吉兵衛の在所に挨拶に行つて四・五日逗留して来た。これに対して七日には、吉兵衛自身が

土産物を携えて清水へ赴いた。⁽²⁴⁾その際彼は、

一船破損無⁽²³⁾之内、吉兵衛様御見物ニ清水へ御越被遊、黒船へ

御乗被成、船より御下り之節、唐人共御祝儀ニ石火矢を放

可⁽²⁵⁾申由申候へハ、吉兵衛様御意被成候ハ、岡へ御上り以後

放候へと被仰付、得と岡へ御上り、浜へ毛氈を御敷せ、御休

息被遊節石火矢放申候、

と、船に上つて見物し、浜に毛氈を敷かせて、イスパニア船の放

つ祝砲を楽しんだ。

以上、見てきたように、この漂着船に対する処遇には、高知の

家老生駒木工と連絡をとりながら、山内吉兵衛が諸事万端に携わっている。これは、彼が清水港に近い中村に居住しているからというだけではなく、吉兵衛は自分の経験を

一我等在江戸之時分、^(上総国岩和田)下総之国瓦瀧へ黒船寄、打わり申候、則注進申上候処ニ 公方様より御奉行堅被^レ仰付、荷物少も違候ハぬやうニ被^レ成、主ニ被^レ遣候、其上江戸ニ御座候唐船御兵糧迄被^レ遣、一入御懇ニ而罷帰、次年頼而御礼ニ参申候、

と生駒木工に宛て記しているように、慶長一四年(一六〇九年)、上総国岩和田に漂着した、前フィリッピン臨時長官ドン・ロドリゴ・デ・ビエロ⁽²⁷⁾(Don Rodrigo de Vivero y Velasco)の乗船サン・フランシスコ号(San Francisco)が家康に厚遇された事、翌年答礼使「ノバ・イスパニアから遣わされたセバステイアン・ビスカイノ⁽²⁸⁾(Sebastian Vizcaino)」がやって来ている事等を彼はよく知っていたからであろう。それに加えて、山内家には慶長七年度のエスピリット・サント号の苦い経験もあるので、吉兵衛は生駒木工宛に、

自然、唐人共腹立様ニ仕候而ハ、いか様之儀も可^レ有⁽³⁰⁾御座候哉と、先々たらし申鉢ニ御座候、と記して、極力イスパニア人の機嫌を損ねないように気をつけている。六月一日に、高知の山内忠義謁見のために浦戸まで出向いたカピタンの待遇についても、

乍⁽³¹⁾恐言上仕候、黒船かびたん御目見ニ参上申候、萩野久左衛門、樋口関太夫召連候、我等之小姓一人指添進上申候、万事様子、具ニ兩人可^レ被^レ仰上候、不^レ及⁽³²⁾申上ニ候へとも、随分御

懇ニ可^レ被^レ成候、⁽³¹⁾と云つて、くどい程、生駒木工宛に指示している。

以上、漂着イスパニア人に対して、幕府の指示を待ちながら、神経を使っている山内家の対策と待遇の状態を追ってきたが、次節では、そのイスパニア船の性格や乗組員の取扱ひ、出航までの経過などを見てみたい。

(二) 漂着船乗組員の取扱ひ

元和二年五月末に、土佐清水港に入津した漂着船は、破損した箇所を修理するために、

一昨日、唐人共申候ハ、舟之作事之用意仕度候間、中之嶋ニ小やかかけをかけ候てくれ候へ、奉公人共⁽³²⁾「ケ置申度と申候、幸ニ吉兵衛様被^レ成⁽³³⁾御座儀ニ候条、何様ニも必^レ御意可^レ申候、と、六月六日、吉兵衛に小屋を建て、奉公人(修理人か)を雇う事を願ひ出て許されている。しかし、七月の中旬になるとこの地方一帯は、

熊以⁽³⁴⁾飛脚ニ申上候、昨日拾四日之大風・大水ニ委許之様子、家・田地いたミ申候、其許いかゞ御座候哉、無御心元一奉⁽³⁵⁾存候、という嵐に見舞われ、又、八月三日の書翰に、

熊以⁽³⁶⁾飛脚ニ致言上候、此中打続切々大水・大風吹申、委許之様子御推量之外ニ御座候、とあるように、連日の大嵐で、清水港に碇泊していたイスパニア船は、

随而、清水黒船、縄きれ申候て、家之前へ吹上申よしニ御座候、⁽³⁵⁾侍共十人宛於^レ手⁽³⁷⁾今申付置候、左様ニ御座候へハ黒船も、先日

之風ニ打已り、役ニ立不_レ申候之条、番之者御無用かと奉_レ存候、⁽³⁶⁾
とあつて、船の鰻綱が切れて海岸に打ち上がつてしまひ、其後も
続いた嵐で、とうとう船が破壊して役に立たなくなつてしまつ
た。そのため、彼等が脱出する危険もなくなつたので、見張りの
一〇人の者も最早、必要ではなくなつてゐる。

破壊した船は、港で解体し、部品の釘・錨などを売り捌いてい
る。⁽³⁷⁾ その値段について、イスパニア人側の言い値はわからない
が、山内家側では、その方面に詳しい町人を通じて交渉し、豊後
・長崎、果てはルソンでの相場を持ち出して、双方の折り合
いが中々つかずもめてゐる。⁽³⁸⁾

この取引きの時と一緒に、山内忠義は赤・黄・青・白の鳥の羽
六枚と、イスパニア人所有の「むらさきかつは」⁽³⁹⁾「せりけた」⁽⁴⁰⁾
「とうぶく」等を値段に構わず買い上げてゐる。

この漂着船の積荷に関して、九月一四日に織田丹後守が山内忠
義に認めた書翰には、

黒船ニ珍敷道具も御座候かと被_レ恵召_二候へハ、銀子四千貫計ニ
て、よの物者なにも無_二御座_一候、⁽⁴¹⁾

とあつて、めずらしい品物は何もなく、四千貫の銀子を積んでい
ただけであると記している。そして、六月七日、見張りの家来二
名の報告には、

今日までハ、弥あきなひ物少もいたし申鉢ハ無_二御座_一候、⁽⁴²⁾
とある。又、六月二五日には、

御分国幡多郡清水表へ小黒船流寄申候由蒙_レ仰候、御紙面之通
達_二聞_一候処、何方へ参候共、又其許ニ而商売仕候共、彼船主

元和二年土佐漂着イスパニア船について(小野)

次第二御かまいなされましき之旨上意候間、可_レ被_レ成_二其御心
得_一候、⁽⁴³⁾

と、老中土井大炊助・利勝・安藤対馬守重信・酒井雅楽頭忠世・本
多上野介正純の四人連名の奉書によつて、商売を許されたにも拘
らず、これ以後の書翰には、大きな取引を行った様子は窺えな
い。

通常、ノバ・イスパニアからフィリッピンへ向う船は、メキシ
コで産出した銀をもつてマニラに運び、その地で仕入れたアジア
の諸物資をノバ・イスパニア及び本国で売り捌くのであるから、
アカブルコを出航する船は、ほとんど積荷(交易品)は有さな
い。故に、この漂着船も、その類の船ではないだろうか。

さて、乗船の破壊してしまつたイスパニア人たちは、目向まで
船で、そこから陸路長崎へ行き、フィリッピンへ向うことになつ
た。八月一四日に、一行は、藩主山内忠義から八艘、忠義の実父
で中村領主の山内修理から足りない分の船を遣わされ、八月二三
日には、

以上

御書頂戴仕候、然者御舟早々に被_レ仰下_二候、忝次等不_レ可_レ過_レ之
候、爰許も近日仕舞候て出船可_レ仕と奉_レ存候、万事難_二御礼申
尽_一候、恐惶謹言、

八月廿三日

かびたん

松平土佐守殿

署名

として、出発の準備万端を整えた。⁽⁴⁷⁾ そして、九月五日になつて、

イスパニア人は日向へ出航したが、これより先九月一日に吉兵衛は生駒木工に

南蛮人日和次第出舟仕様ニ承候、從^(マ)江戸黒船われ申御注進之様、左右御座候而出舟被^(マ)仰付^(マ)候哉、無^(マ)心元奉^(マ)存候、御分別之前申上義、近比慮外千万ニ御座候へ共、從^(マ)江戸何と被^(マ)仰出^(マ)候はん哉、船出候て跡にてハ罷成申間敷候、後日一大事之儀ニ候条、御一左右御待被^(マ)成候て可^(マ)然と奉^(マ)存候、⁽⁴⁹⁾と聞い糺し、イスパニア人たちは近日中に出船するが、今一度、幕府の意向を伺った方がよいのではないか。出航してしまつてからではどうしようもなくなつてしまふと心配している。

一方、長崎に到着したイスパニア人一行は「大黒船」に便乗してフィリッピンへ向つてゐる。この「大黒船」は、出航間際にカピタンが山内忠義へ宛てた謝礼の書翰に

将亦末大黒舟出舟不^(マ)仕候条、皆々満足仕候、即今明日之内ニ出舟可^(マ)仕候之条、可^(マ)御心易^(マ)候、⁽⁵⁰⁾

とあり、この「大黒船」は、イギリスの平戸商館長リチャード・コックス(Richard Cocks)の日記に『Great Spanish ship』が薩摩に漂着して、長崎に廻航されていたとある船と同じである。⁽⁵¹⁾

この「大黒船」に対して、土佐に漂着した船は、本多上野介が山内忠義へ宛てた書翰に

貴札致拜見候、仍御領分幡多郡清水浦へ小黒船一艘流寄申候とあつて「小黒船」として区別されている。⁽⁵²⁾

このように「大黒船」と「小黒船」と対照されていることを考

えてみると、当然ノバ・イスパニアとフィリッピンを結ぶガレオン貿易の船団ではなかつたかと思われる。ガレオン船の編成は、ゼネラル(総司令官 *zenelar*)の旗艦(flag ship)と、アルミランテ(艦隊長官 *almirante*)又はカピタン(隊長 *captian*)の乗船の二隻からなつてゐるので、この両船もそれに当るのではないかと思われる。これについて、「大黒船」の方の漂着月・日(江戸に居たりリチャード・コックスは一月二日(元和二年九月六日)にその船の伝聞を記している)は、はつきりしないが、この大黒船はフィリッピンから来たものではなく、ノバ・イスパニアからフィリッピンに向つてゐた事は事実であるし、又、六月二日、吉兵衛から生駒木工への書翰に、

一今一艘奥ニ黒船相見え候よし、萩久左衛門申上旨、具ニ御説畏存候、随分御懇候へと浦々へ可^(マ)申付^(マ)候、⁽⁵³⁾

と認められてゐる。このもう一艘の黒船について、他の書翰には記されていないが、この船が、土佐の沖から薩摩まで漂流して行つたとも考えられるので、この「大黒船」は土佐漂着の「小黒船」の本船であつたとしても良いのではないだろうか。⁽⁵⁴⁾

そして、出航間近い九月二五日にカピタンは「ありやす三足・くつ二足・たばこ二〇斤」を御礼として山内忠義に贈り、大黒船の指揮官も「たばこ五〇斤」を贈つて、

追而申上候、此前者御国江黒舟入申候事、きつかい仕候へ共、此中之御馳走蒙候而満足不^(マ)被^(マ)過^(マ)之候、以来之儀も不^(マ)相替^(マ)一偏^(マ)ニ奉^(マ)願候、此通るそんにてくハしく物かたり可^(マ)申候、⁽⁵⁵⁾と云つて礼を述べ、且、

為「御札」御音信申度候へとも、かならず、るせん可申上⁽⁶⁹⁾候、翌年の謝状を約束している。

この大黒船は、アンドレス・デ・アルカラス (Andres de Alcareas) の報告によると、この当時、オランダ艦隊によって封鎖されていたマニラの窮状を救い、討伐艦隊を組織するのに役立った八〇万ペソの銀をもたらしたという。そして、指揮官のドン・フランシスコ・ブラボ・デ・ラ・セルナ (zenelar Don Francisco Bravo de la Serna)⁽⁶⁷⁾、日本の支配者によって厚遇され、免許状をも得たと伝えている。そしてこの船を、土佐の漂着イスパニア人を乗せてマニラに向った大黒船と断定したのは、指揮官の名が「大黒船のぜねらる」の署名に合致するからである。土佐の「小黒船のかびたん」の署名は Fernando B. Cavallo とあるが、これに照合する史料は見つからなかった。⁽⁶⁸⁾

さて、この大黒船がマニラに持ち帰った八〇万ペソの銀であるが、これは日本銀に換算すると約三、五〇〇貫である。⁽⁶³⁾ 土佐漂着船の積んでいた銀が四、〇〇〇貫であるから、八〇万ペソの銀は小黒船のものではないだろうか。その銀は、一度は山内家の奉行を通じて、進上という形で取り上げられているが、戻されてマニラに持つてゆく事ができたのではないだろうか。

又、先の報告にある免許状 (Permisson) とは朱印状の事であろう。そして、この朱印状を得たのは土佐の漂着船の方であろう。というのは、土佐の船よりずっと遅れて薩摩に漂着し、後長崎へ廻航された大黒船が、江戸まで使節を派遣するのは無理ではなかったか。これに対して、小黒船のイスパニア人に対しては、六月

一日には江戸へ使者を派遣するようにとの下知があり、使節の一行には、「土佐国群書類従」の「御家中名譽記巻一」の五藤利右衛門元成という者の項に、

一元和二年清水浦へ黒船漂著いたし、依之異国人江戸表へ被ニ差立ニ付、右御用一卷引率メ相勤候様ニ被ニ仰付、異国人召連レ罷登於江戸公辺御用向を初、万事之首尾残処なく相勤メ候、⁽⁶⁷⁾

とあるように、五藤利右衛門という者が附添って一切を取りしきっている。又、リチャード・コックスの日記、一六一六年八月二七日 (元和二年七月一日) の項に、彼が將軍謁見のために江戸に到着した日、イスパニアのパイロット (水先案内人) 二名が彼の宿舎を訪問して来たと認めている。⁽⁶⁸⁾ この頃、江戸に居るイスパニア人には、一六一五年末にアカブルコから政宗の船に便乗してきた使節の一行も考えられるが、彼等は、家康・秀忠への謁見もかなわず、この年 (一六一六年九月三〇日) マカブルコに出航するまで、監視されていた状態であったので、コックスを訪れたりはしないであろう。この二人のパイロットは、土佐漂着船からの使節ではないだろうか。江戸から上府の沙汰のあったのが六月四日であり、数日で使節が発したとしても、七月一日まで二五・六日の日数がある。土佐から江戸への旅は、普通浦戸湾か甲浦から船で大坂へ行き、陸路江戸へと向うのだが、約二〇日前後かかったとしても、七月一日日には江戸に居て当然である。既に、六月二六日には、本多上野介を通じて將軍へ注進されている。⁽⁷⁰⁾ 多分この二人のパイロットは、この時將軍謁見も済ましている。

たのであらうから、先の免許状（朱印状）を交付されたとしてもおかしくはないであらう。

以上、見てきた限りでは、この土佐漂着船は、幕府と山内家に感謝して、無事マニラに向ったようである。しかし、元和二年（一六六一年）は、四月に大御所家康が死去の後、二代将軍秀忠のもとに、キリシタン禁制が益々強化され、八月八日には、

追而唐船之儀者、何方着候とも船主次第商買可仕之旨
被仰出候、以上、

急度申上候、仍而伴天連門徒之儀堅御停止之旨、先年相国様被仰出之上者、弥被存^レ其旨^一 中略、猶又黒船いきりす舟之儀者、右之宗觔候之間、至御領分^二、着岸候共、長崎・平戸へ被遣、於御領内^二売買不仕様ニ可被^レ申付候、此旨依^二上意^一如^レ斯候、恐々謹言、
という、支那以外の諸外国船は、貿易と入港地に制限を加える旨の台命を奉じた書翰も出されている。この奉書の影響は九月一日附のカピタンの書翰に、

追而申上候、加様ニ外聞うしな^い申候事御座有間敷かと奉^レ存候、是非とも以来之儀奉^レ頼候、⁽⁷²⁾

と抗議を申し込んでおり、このような事があるとこれから先の船の派遣は難かしいと言っている。

なお、松田毅一先生の「キリシタン研究・四国編」には、寛永元年にキリシタンの処刑があつたが、そのバードレたちは、元和二年六月頃、フィリッピンから航行中清水港に漂着して監禁されていた者であるとの、山内文書の記事が載せてある。この原史料

に、直接當つて確かめることが出来なかつたが、本稿で論じた元和二年五月末、清水港に漂着したイスパニア船は、ノバ・イスパニアからフィリッピンに向う途中漂着したもので、前述のように関係文書は、六月四日を初見として、つきつきと発せられて、フィリッピンから航行した船に関するものではないようである。それでは、ほとんど同じ頃に二隻のイスパニア船が清水港に漂着したことになるが、これは全く別の船を指したもののか、あるいは、実は同一船に関する誤聞かと思われるが、これについては、今後さらに検討しなければならない。

いづれにしても、山内家としては、慶長七年の「エスピリット・サント号」で幕府から譴責された苦い経験と、同一四年の「サン・フランシスコ号」に対する幕府の対遇を考えて、元和二年五月末の漂着船を大いに好遇したが、これも表面上の事であつたのだらう。すでに、キリシタン禁制・貿易制限へと向う幕府の体制は変るべくもなく、あるいは、この漂着船も何らかの影響を及ぼしているのではないだらうか。

四、おわりに

私は、本論文には、近世初頭四一年間に渡る対イスパニア交渉史上、三隻のイスパニア漂着船を迎えた土佐藩の対策を取り上げ特に、史料紹介も兼ねて元和二年度のイスパニア船について述べてきた。

近世初頭、日本は欧州四国家と接し、その文化を輸入し、その産物を交易した。その中にあつてイスパニアは、フィリッピン諸島

という地理的優位を持って対日貿易の発展を期したが、それに伴うキリスト教の布教・植民政策の故に、日本の為政者に受け入れられず、遂には、日本の二五〇年に渡る鎖国という特殊な状態を引き起す要因となっている。現在私は、このような対イスパニアとの交渉をより具体的に把握するために、船の来航状態を調べている。本稿はその中の漂着船に限ったが、それだけでも、ここに揚げた史料の他に、種々の史料、特に外国側の史料があると思われる。しかしこういう研究に、最も必要とされる語学力不備のために、史料を広く搜索利用できなかったのが残念である。

〔附記〕本稿作成にあたって、種々の御助言御指導を賜った井沢実先生、村井益男先生、並びに高知県立・市民図書館の皆様に、深く謝意を表したい。また、全てにわたって御世話を掛けした指導教授若生成一先生に厚く御礼を申し上げる。

註

(1) 村上直次郎「貿易史上の平戸」附録史料ロ・ハ・ニ、日本学術普及会、大正六年

(2) James Alexander Robertson & Emma Heren Blair: The Philippine Islands, vol 22, p. 145. Relation of the condition of the Filipinas Islands and others regions surrounding 1626.

レオン・パジェス「日本切支丹宗門史」下巻八頁、吉田小五郎訳 岩波文庫

従来迄、一六二四年と言われていたが、右の史料によって一六二五年まで、イスパニア船は来航したとする。これに

元和二年土佐漂着イスパニア船について(小野)

については、なお、史料の発見につとめ、研究しなければならない。

(3) 卒業論文に於いてまとめた数、これらの船の来航状態については、次の機会に発表したい。

(4) モルガ「フィリピン諸島誌」三八四頁、大航海時代叢書Ⅶ 岩波書店

William Lytle Schurz; The Manila Galleon. Part II The Navigation, 5. The galleons, p. 193. E. P. Dutton & Company, New York 1939.

(5) モルガ「フィリピン諸島誌」四一〇頁

(6) 例えば、家康がフランシスコ会宣教師ヘロニモ・デ・ヘススを通じて、関東浦賀へ、イスパニア船の来航を希望した事。又、伊達政宗がイスパニアに支倉常長を遣わして、貿易を望んだ事など。

(7) 村上直次郎「長崎市史」西洋諸国編附録史料第一号、長崎市役所

アビラ・ヒロン「日本王国記」二二八―二七〇頁、大航海時代叢書Ⅸ 岩波書店。

モルガ「フィリピン諸島誌」一〇七―一四頁。

(8) アビラ・ヒロン「日本王国記」二八〇頁。

モルガ「フィリピン諸島誌」一八四―二三〇頁。

レオン・パジェス「日本切支丹宗門史」上巻二五頁、吉田小五郎訳。

(9) モルガ「フィリピン諸島誌」二二二―二三五頁

法政史学 第二十号

「当代記」七九頁 史籍雜纂二。

The Philippine Islands. vol. 12, p. 76. Letter from Marga to Felipe III. Manila, December 1, 1602.

ibid. vol. 12, p. 128. Letter to Felipe III. Pedro de Acuña, and others; Manila, July December 1603.

(10) 「通航一覽」第四、五七〇—五七一頁、清文堂。

(11) 大日本史料一二編・二八、二三八頁。

(12) The Philippine Islands. vol 18, p. 247—49. Letter to Felipe III. Alonso Fajardo de Tenza; manila, August 10. 1619.

(13) 司法行政院、モルガ「フィリピン諸島誌」補注の二(四二〇頁)参照。

(14) 従来、山内家の文書は戦災でほとんど焼失し、在高知県立図書館の史料も焼失したと思われていたが、昨年十一月、高知で開かれた地方史研究協議会の大会に参加された、村井益男先生が、県立図書館書庫を調査されて、偶然この原文書を発見された。なお、この史料の一部(14⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑)の紹介が「土佐史談」三九号(昭和七年六月)の『土佐漂着船に関する文獻』追補として、六頁にわたって関田駒吉氏が発表されている。しかし、これらがこの史料からの引用かは未詳である。

次に、これらの史料の日・時と発・受信者を記す。以下この史料に関して註にはこの番号を用いる。

(発信日)

① 元和二年
六月四日

② 六月七日

③ 同

④ 六月一日

⑤ 六月二日

⑥ 六月一日

⑦ 六月一日

⑧ 六月一日

⑨ 六月一日

⑩ 六月二日

⑪ 七月一日

⑫ 七月一日

⑬ 八月三日

⑭ 八月一日

⑮ 八月一日

⑯ 八月一日

一五四

(発信者)

山内吉兵衛

真鍋善右衛門
樋口関太夫

山内吉兵衛

同

同

同

同

同

山内吉兵衛

本田上野介

修理

山内吉兵衛

同

かびたん

修理

萩野久左衛門
真鍋善右衛門
渡部左太夫

(受信者)

生駒木工

勘七

生駒木工

同

同

同

同

同

生駒木工

松平土佐守

山内対馬守

生駒木工

同

松平土佐守

萩野久左衛門
真鍋善右衛門
渡部左太夫

勘七

- (17) 八月二三日 かびたん 松平土佐守
 (18) 九月一日 山内吉兵衛 生駒木工
 (19) 九月一日 かびたん 松平土佐守
 (20) 九月七日 山内吉兵衛 生駒木工
 (21) 九月一四日 織田丹後 松平土州
 (22) 九月二五日 かびたん 松平土佐守
 (23) 同 ぜねらる 同
 (15) ① ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑫ ⑬ ⑮ ⑯ ⑰
 (16) ①
 (17) ②
 (18) ⑤
 (19) ①
 (20) ⑪
 (21) 「土佐史談」三九号、関田駒吉「土佐漂着船に関する文獻」
 追補二八頁所収『御代々記』卷一忠義公
 (22) ②
 (23) 右同
 (24) 右同
 (25) 「南路志」卷三一、「中ノ浜与次兵衛祖母覚之事」史料編
 纂所蔵
 (26) ⑥
 (27) ドン・ロドリゴ「日本見聞録」序説二所収、『ドン・ロド
 リゴの関歴』村上直次郎著四頁、駿南社
 元和二年土佐漂着イスパニア船について(小野)

- (28) ドン・ロドリゴ「日本見聞録」異国叢書 駿南社
 (29) セバステイアン・ビスカイノ「金銀島探検報告」異国叢書
 駿南社
 (30) ⑥
 (31) ⑨
 (32) ②
 (33) ⑫
 (34) ⑬
 (35) ⑫
 (36) ⑬
 (37) ⑯(本稿末尾の史料)
 (38) 同右
 (39) スペイン語の *Sericum* (絹の事) を元とする。スペイン語で
 は愛称の語尾に "ita" をつけるが、(*Amiga* → *Amiguita*)
 この「せりけた」も *Serica* から変化して、絹の美しいも
 のをこう呼んだのではないだろうか(井沢実先生の考証に
 よる)。
 (40) 胴服の事
 (41) ⑪
 (42) ②
 (43) 「修史餘録」二〇、雜篇二七「元和二年六月、幡多郡清水
 浦へ呂宋船漂着の事」高知市民図書館蔵
 (44) ⑯
 (45) ⑮

- (46) 同右
 (47) ①⑦
 (48) ②⑧
 (49) ③⑨
 (50) ④⑩
 (51) Cocks, Richard; Diary of R. Cocks, Cape Merchant in the English Factory in Japan, Tokyo, 1899, vol. 1, p. 193, October 17.
 (52) ⑪
 (53) モルガ「フィリピン諸島誌」三八四頁
 Schurz; The Manila Galleon. part II. The Nanigatton, 5, The Galleon. p. 193.
 (54) The Philippine Islands. vol. 18, p. 51. Letter to Felipe III. Andrés de Alcaraz; Manila, August 10, 1617.
 又、積荷の状況もその裏づけであろう。
 (55) ⑤
 (56) 長靴下の事、荒川惣兵衛「外来語辞典」一、三六三頁、角川書店、昭和四二年
 (57) ⑥
 (58) ⑦
 (59) 同右
 (60) 「大日本史料」一二編・二八、二三八頁
 (61) The Philippine Islands, vol 18, p. 51. Letter to Felipe III. Andrés de Alcaraz, August 10, 1617.
- (62) 井沢実先生、岩生成一先生の解説による。かびたんの署名については、なお検討の必要がある。
 (63) I デュカット = 銀 1 両 1 ヶツ = 1 ドル
 I デュカット = 2.25 ドル = 2.25 ヶツ = 1 両
 1 貫 = 225 ヶツ 故に 4,000 貫 = 900,000 ヶツ
 800,000 ヶツ = 3,555.5 貫
 大川周明「近世歐羅巴植民史」附録、貨幣換算表
 岩生成一「朱印船貿易史の研究」二六二頁
 (64) ⑬
 (65) ⑭
 (66) ⑮
 (67) 「土佐国群書類従」五〇、伝記部一二、御家中名譽記卷一五藤利右衛門元成の項
 (68) Diary of R. Cocks. vol. 1, p. 166, August 27.
 (69) 「日本切支丹宗門史」中巻一〇——一二頁
 (70) ⑯
 (71) 「修史餘録」二〇、雜編二七
 (72) ⑰
 (73) 松田毅一「キリシタン研究」四國編 一八四——一八五頁
- 〔史料〕
 註(37)~(40)に当たる史料「⑩」で、取引きの事などを述べている唯一の書翰なので、全文掲載する。
 追而申上候、豊後々人をめしつれ売申候を、かたく爰元ニ而うり申儀留申候、いかゞ御座可レ有候哉、以上、

次以ニ飛脚をニ態致言上ニ候、然者爰元へかひたん参替々満足仕
 鉢ニ御座候、

一其元々被ニ仰付ニ候舟之儀、おそく候とて事之外急申、迷惑かり
 申候事、

一黒舟之儀、爰元ニ而やきわり候て、くきを取可ニ罷戻旨申候
 間、其段も主次第と申渡候、惣別加様ニそこね申舟之義、やき
 わり候様ニ相聞申候事、

一いかりくし之儀、あきなひなとも仕舟者、いかり沓ツニ付而沓
 貫日はかりも、豊後などにてハ出し申様ニ相聞申候、長崎之儀ハ
 しれ不申候、但日本舟るすんへ参候而ハ、沓艘ニ付三貫目も
 出し申様ニ取沙汰申候、爰元慥成儀不ニ承届ニ候、其元ニ自然御
 存候町人も可レ有ニ御座ニ候間、被レ成御聞立可ニ仰下ニ候、いか
 ほと出し候へと被ニ仰懸ニ儀申渡、同心不レ参候ハ、舟いつま
 ても留置可レ申候哉、御定前かとニ承度奉レ存候、

一鳥之羽赤キ沓枚、き色成式枚、あほき色沓枚、白キ式枚、此分
 ハ見申候而売候へと申候へとも、有無ニいやと申候、但右之羽
 ハあしく御座候事、

一かつは之儀、相尋候へ共、別ニハ無御座ニ候、あんじ沓つもち
 候へ共、中々うり申問敷とかたく申候、左候へハ、其方ニ罷
 居候唐人のむらさきかつは、其方にて被ニ召上ニ候様ニ御尤ニ存
 候、此方ニ而ハほしきまゝ成儀申候て、とかくちあき不レ申
 候間、有無ニ其方にて御才覚被レ成御召被レ成儀御尤ニ存候、
 若彼唐人此方へ罷越候て、むらさきかつはいかほとならは者被ニ
 召上ニ候へんと可レ被ニ仰下ニ候事、

元和二年上佐漂着イスパニア船について(小野)

一せりけたの儀も高知にて為ニ申上、とうふく沓つに付而四十め
 と申候、かほとにても被ニ召上ニ候哉事、

一一兩日以前ニ唐人之内舟之中、奉行仕候者、よきしによろ式人
 ふせり居申候所を御つれ申候へ共、果申手ニ而ハ無御座ニ候、か
 ひたん参候而彼はせんさく之鉢相見申候、左様ニ御座候へハ、い
 か様之儀共仕出可レ申をも不レ存迷惑仕候、其上萬荷物嶋へ遣候
 へと色々申候へ共、同心不レ仕、家々ニ置申候故、火用心等之
 大事之儀と存候、此等之趣可レ然御披露所仰候、恐惶謹言、

八月十九日

萩野久左衛門

花押

真鍋淳右衛門

花押

渡辺左太夫

花押

勘七殿